

英国研修の旅

月 山 みね子

イギリス/アイルランド ENGLAND IRELAND

0 100 200 km

◎/首都

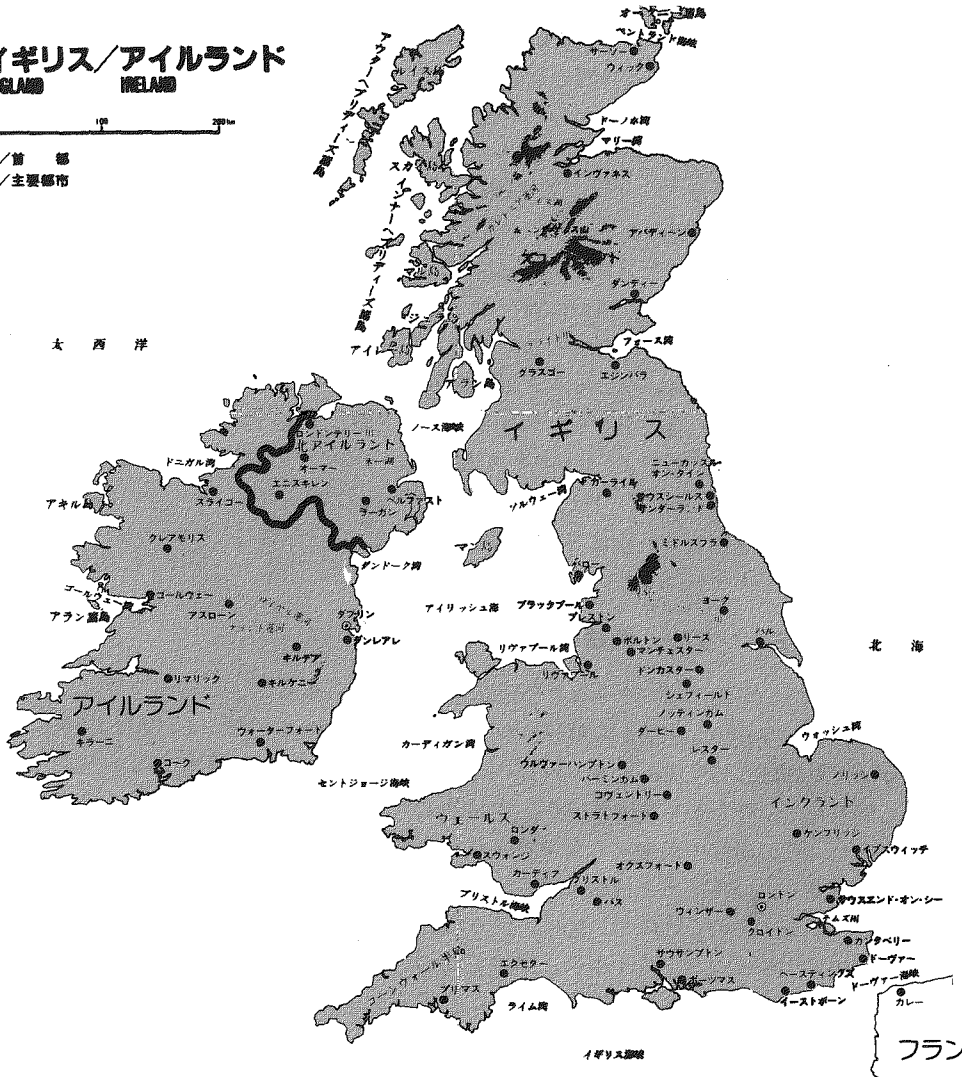
●/主要都市

大西洋

北海

フランス

イギリス海峡



I. は じ め に

1982年7月5日から9月7日まで2カ月あまりの間、文部省と英国文化振興会（ブリティシュ・カウンスル）主催大学英語教員のための研修に参加することができました。研修地はロンドンから列車で30分以内にある郊外都市レディングのレディング大学でした。研修の具体的な報告は別紙英文でさせていただきました。ここでは2カ月間の期間に見聞したエピソードを中心に書いてみました。アメリカとは一味ちがった英国について理解していただければと思っています。私たちが「イギリス」という日本語で指すのは正しくは「連合王国 United Kingdom」のことです。この国は北緯50度から60度にわたる南北に長い大ブリテン島と付属のアイルランド北部で構成されています。大ブリテン島は南から北へ、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドというそれぞれ歴史の違う四つの国を包含しています。女王エリザベス二世はこの四つの国に君臨していられるのです。ウェールズでは英語とは全く違った別の言語といってもよいウェールズ語があり、スコットランドは行政、経済などもイングランドと違いがあり、スコットランド銀行で発行されているスコットランド紙幣もあるのです。「イギリス人」といういい方も遠く離れた日本流の呼び方で、連合王国にいけば、イングリッシュ、ウエルシュ、スコッティッシュ、アイリッシュとそれぞれ別に考える必要があります。総称して呼ぶとすればブリティシュ・ピープルということになるでしょう。

II. レディング——国鉄のストライキ

7月5日の早朝にガトウィック空港に無事に到着しました。長時間つづいた機内のきゅうくつな生活から解放されてその喜びをかみしめながら、おもいきり手足を伸ばして空港の土をふみしめました。入国手続きをすませてはっとする間もなく、今日から英国鉄道が、全面的にストライキに突入したことを知りました。この研修に参加する大学教員のために、文部省で一日オリエンテーションがあり、いろいろと情報は前もって聞いていたのですが、悪名たかいこの国のストライキのことについては、何も聞いていなかったのです。恐らく私達が英国の大規模なストライキに、始めて遭遇したのではないのでしょうか。この国鉄のストライキは3週間あまり続いたのです。そしてこの後に病院の看護婦さんたちの大規模なストライキなどが続きました。

英国研修の旅

日本でもストライキはあります。年中行事のようにになっている国鉄・私鉄の春闘があります。しかし日本と英国のストライキは根本的な違いがあるようです。質的にも量的にも。この根本的な違いを知るには労働組合がどのように組織されているかを知る必要があります。日本では労働組合は企業別に組織されていますが英国では職業別です。企業別であればストライキの直接効果は、ストライキを行なった会社だけに限定されています。職業別の場合には、その職種の人を使っているすべての会社に及ぶわけです。看護婦さんのストライキは一病院だけにとどまらず全ての病院、医院などに及ぶわけです。これを考えただけでもストライキの質的・量的な違い、人々がうけるストライキの影響も、日本と全く違うことがいくらか理解していただけるでしょう。数年前に私はヒースロウ空港から日本に帰国しようとした時、パイロットのストライキに遭遇して、足どめを余儀なくされました。英国でパイロットの組合がストライキを決行した場合には、日本航空も全日空も東亜航空も同時に運航を停止することになるのです。英国の労働組合は、日本にくらべると労働者に有利のように組織されているのでしょうか。日本人のなかには英国のこのストライキの多発性をこの国が階級国家であるとか、このストライキの多発が、英国病の誘因であるように短絡的な意見をいう人もあります。ストライキと英国病の関係はさておいて、三週間続いたこの国鉄のストライキに対する英国国民の反応について触れることにします。

Ⅲ．英国人は寛容（トレラント）である

ストライキ突入の第一日目の空港は平静そのものでした。入国・出国する旅行者の数はかなりありましたがストライキに関するアナウンスや掲示などは全然ありません。人々は悠然とそれぞれの進路に向っているようです。いそぎあしの人はどこにも見られないのです。国鉄を利用してレディングに行く予定であった私たちにとっては迷惑なことでした。頭上の方向指示にしたがってリフトで地下1階に降りレディング行きの長距離バスに乗りこみました。おかげで大学に到着したのは午後おそくなってしまいました。大学では研修の担当者の一人であるジョン・ロバーツが歓迎のあいさつにきましたが、彼の言葉のなかにも、バスの乗客の会話のなかにも、ストライキにかかわりあいのある話題はでないのです。英国にオープン大学とよばれる制度があります。多くの社会人がこの制度を利用して専門教育をうけ生涯教育の一環となっています。私たちが

レディング大学にいました時に、大学が統計学などの分野で、オープン大学の会場校になっていました。それこそ大ブリテン島の各地から、すでに社会人である人たちが参加して研修にとりくんでいました。その数は300人位あったかも知れません。2週間あまりこの人たちと Bridges Hall とよばれる学寮の大食堂で朝食・昼食をともにしました。オープン大学の学生たち、またオープン大学の先生方とも食事をしながら楽しく会話を続けました。ある時わざとストライキを話題にのせましたら、彼らはこのストライキが何故に決行されたのか、早期解決がどうして困難であるかなど、いろいろと話してくれました。しかしストライキそのものを非難したりすることはありませんでした。このストライキで、いらいらしていたのはロンドンへの足をうばわれて、レディングにとじこめられていた、私たち日本人であったかも知れません。労働組合そのものの組織の違い、その為にストライキが日常生活にあたえる直接、間接的影響は私たちが日本で体験するものと比較できないくらい大変なものがあったと思うのです。それにもかかわらずストライキは働く者の当然の権利の一つと思って容認していたようです。私はここに英国国民の特質の一つともいえる寛容性（トレランス）を見たように思いました。

寛容とは何でしょう。英国国民の寛容性についてもう少し話してみたいと思います。森嶋通夫氏（京都大学経済学部卒、ロンドン大学教授）の話を引用してみます。「第二次世界大戦でイギリスでも日本でも政府は長期戦を覚悟していた。そしてある段階で労働者の不満に直面した。この場合、政府は強権で不満を押しつぶしてしまうことも、不満をオープンにして平時と変らない態度で不満を処理することもできる。前者をとったのが日本で後者を英国がとったのである。短期戦ならばよいかもしれないが長期戦ならば後者をとるべきである。英国は賢明にも後者を取り不幸にも（？）日本の軍部は前者を採用したのである。」森嶋氏は寛容とは自分自身がいやでも許さなければならないという。「ミニスカートは英国に端を発したのである。当時、ロンドンの大通りを山高帽をかぶった英国紳士風の上役とミニスカートをはいたセクレタリーが歩いているのをよく目にした。このような状態を寛容といえる。反対の例としてジーンズをはいている女子学生の聴講を許さなかった一外人教師の例を取りあげることができる。」

イギリス人は寛容であることを非常に大切な徳であると信じています。第二次大戦中の記事を取りあつかったタイムズのなかに次のような記事があります。

「次の週末にはおそらく敵の空襲があるだろう。したがってもし皆さんが外出される場合には帰りの汽車が不通であるかもしれないということを勘定にいれて、どうぞ外出して下さい。」当時の日本から見て非国民的に行動していたのは、単に労働者だけでなく、イギリス人全体が多かれ少なかれそうだったように思うのです。なぜならタイムズの読者層は貴族階級・知識階級といわれているからです。再度森嶋通夫氏の言葉を借りてこの稿をおわります。「イギリス人がナチズムに対して頑強に戦ったのは、寛容な社会を保存するためであって、したがって戦時中の戦意高揚映画の多くはナチス国家との対比で英国における自由を非常に強調している。」

Ⅳ. 一に行列（キューイング）二に行列（キューイング）

ヨーロッパに住居をかまえるとまずキューイング—行列すること—を学ばなければならぬといわれます。パリ、ローマ、西ベルリンなどを訪れた時にそれ程キューイングの印象は強く残っていません。しかし今回、イングランド、ウェールズ、スコットランドの諸都市に滞在してみて、英国でキューイングが徹底していることを知りました。商店で、銀行で、郵便局で、セルフサービスのレストランで、じっと自分の順番がくるのを待つのです。ある日ビクトリア・ステーションの Kiosk で、チョコレートを買うとして品物を選んでいました。人の気配に気がついて振りかえるとなんと十数名の人が列んでいます。あわてて「どうぞおさきに買って下さい。」とすぐうしろの紳士に言ったのですが「ゆっくりどうぞ…」といって待ってくれるのです。英国はご存じのようにどの地方も歴史上なにか関わりあいのある寺院、教会、建造物があります。そのような建造物内のガイド・町の案内は市民の篤志家ボランティアがしています。寺院、教会内のえはがき・スライドなどを売っている店の販売員もボランティアであることが多いのです。買物をして代金を支払う時、皆きれいに一列にならんで待っています。計算器などではなくて筆算でする場合がほとんどでした。旅行者が一人でもトラベラーズ・チェックを使用した場合など、待っている人たちはお手あげの状態です。でも誰も文句をいいません。日本ならば行列のなかから怒声がとびだしたり、また要領のよい者がわりこんだりするでしょう。経営者？の方も従業員の数をふやしたり臨機応変の処置をとるかもしれません。しかしそんなことは全然おこらないのです。考えてみますと、忍耐を必要とすると感じているのは、私たちが日本人であるからかもしれません。

ロンドンで走っているのは犬と日本人だけだといった人があるくらいですから。私たちが相当にセッカチなのでしょう。ヨーロッパの行列にいいかげんうんざりした日本の駐在員が日本に帰国したとたん「行列すべきである。」と思わず叫びたくなったといっています。彼は店先でオタオタして買物ができないのです。「あの……」といいかけると横から「これを下さい。」という声があつて先をこされて、やっと買うことができたのは、まわりに誰もいなくなってからだということです。私には彼の当惑が想像できます。私はずいぶん前に夢の豪華船タイタニック号を主題にしたイギリス映画をみたことがあります。まさにこの豪華な客船が沈没していく時の、乗客の態度が今も目の前にはっきりと浮んできます。一時的にパニックに落ちいった乗客は救命ボートに全員が乗りこむ余地がないと判った時、幼い者、女性を優先的にボートに乗船させて自分たちは一列に整然とならんで見送るのです。この場合には自分の生命が順番に関わりを持っているのです。日頃のキューイングの習慣がなければ混乱は最後まで続いたことでしょう。つけ焼刃ではできないことだとおもいます。またこれは唯たんに習慣というよりもキューイングのなかに貫らぬかれている公正の精神を忘れては理解できないでしょう。どんな非能率な点があつてもキューイングが一番公正だということです。英国人はフェアプレイ・公正であることを大切にします。彼らの公正の原則を理解するためにはトレバー・ゲット著「紳士道と武士道」(サイマル出版会)を是非読んでほしいと思います。公正の精神にもとづいて生れ、培かわれた行列と、行列しないことには秩序が保てない、ということで生れた行列では根本的に違うのです。公正の精神のもとではくずれること、みだす者がありません。方便にできたものはその時だけのものです。日本でも一糸みだれずに行列している風景があります。東京の国鉄・地下鉄のホームでは人々は足もとの白線どおりに行列して列車を待っています。これはこのようにしなければ誰も乗車できないパニックがおこるからです。大阪ではどうでしょうか。電車が到着するまでの行列です。電車が到着すると行列がくずれ横にひろがっていくではありませんか。子供は、子供であることが特権であるかのように抜けがけをして割りこんでくることがあります。大人もこれを大目にみて注意する者ありません。劇場、映画館、デパートのトイレでもキューイングするのです。日本のように横に一列ではなく縦に一列にならぶのです。縦に一列ですから、あとの者が先になるということは絶対におこらないのです。勿論どんな小さい子供もこれを守ります。全ての所で行列をしなければならない

ことを念頭におくと、セカセカと階段やエスカレーターを駆けあがることの愚かさを知りました。何時も20分位の余裕—というより行列の時間を考慮にいれて行動するようになりました。一分をあらそうことなど馬鹿げているのです。公正の精神でキューイングを身につけた国民が、抜けがけや要領のよいことが自慢の一つになる国民を見た場合には無作法で油断のならない国民のように誤解をするかも知りません。

V. のんき哲学とイギリス国鉄

英国人ののんきさと悠々としてあわてない面をあらわしている面白い話があります。エリザベス女王の離宮であるウインザー城を訪れたある日本人が目にした風景です。ウインザー城で立入り禁止の庭園にアメリカ人の若者が入っていて写真を撮っていました。それを遠くから見つけた警備の巡査が、まるでのんびりと散歩を楽しんでいるようなゆっくりとした足取りで、アメリカ人の方に近づいていく姿が、本当に印象的であったというのです。急いでいかないと若者は逃げてしまいそうなのに巡査は少しもあわてないのです。ちなみに英国の警官は武器らしいものもピストルも警棒も持っていません。何んともなく親しみやすく近よって何んでも尋ねられる雰囲気を持っていました。テムズ河を上下する遊覧船に乗って一日を楽しく過したことがあります。船着場である船会社の往復切符を買って乗船し、グリニッチで下船し、半日を観光に過して帰ろうとした時に、どの船会社の船に乗ってもよいというのです。しかも私は切符もなくしていたのですが、にっこり笑って(?)乗船を許してくれました。なんというおおらかさ、のんびりさかと感心したものです。次のエピソードはこれも私たちが実際に体験したものです。この研修の参加者の一人である桜の聖母短大の斎藤栄二氏が福島民報社に寄せられた便りの一部を紹介させていただきます。

「ロンドンのコベント・ガーデンにあるロイヤル・オペラハウスで歌劇ラ・ボエームを見た帰りのことです。急がないと帰りの列車に間に合いません。パディントン駅まで同僚四人とタクシーで駆けつけました。パディントンの大きなドームの下に何本もプラットホームがあり、日本の上野駅のように。お目当てのプラットホームに着いた時は、列車はもうすでにゆっくりと走り始めていました。私たちは内心あきらめたのです。ところが走ってくる私たち一団を見て、列車はスピードを落とし、一瞬停車しました。そして車掌がドアを開けてくれたではありませんか。決してローカル線ではありません。インターシテ

ィと呼ばれる日本の特急に匹敵する貫録の列車です。私たちが車内で切符の検札にきた車掌に「サンキュー」を連発したのは言うまでもありません。

その日の朝には次のような経験をしたのです。

四人で切符を買ったのですが、最初の一人が3ポンド95ペンスで二人目からはみんな1ポンドでよいという窓口の話です。たとえば日本式でいくと、近郊から東京へ行く場合、一人目が4000円であとはみんな1000円ずつでよいというわけです。列車に乗りこんでその座席がまたすばらしい。その上に部屋に仕切られている。それもそのはずです。車掌がまわってきてわかったのですが、私たちは二等の切符で一等に乗り込んでしまったのです。しかし車掌の反応がまたあっさりしたものです。「OK, OK, だれも来なければそこにいてもいいよ」

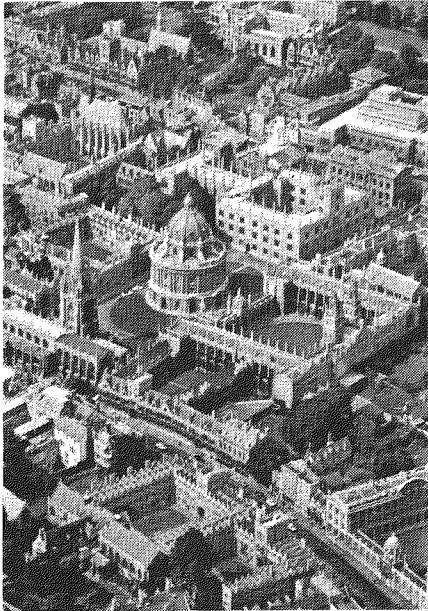
イギリスでも一等に乗る人はそんなに多くありません。かくして私たちはロンドンまで重役気分で到着しました。

到着したところ、今度は列車の戸が開きません。プラットホーム側から自分の手で開けないといけないのです。終点だからよかったものの、そうでなかったら降りたい駅で降りられず通過してしまいます。そのイギリス鉄道ですが私たちが到着した7月5日にはすでにストに入っていました。少なくとも400時間以上列車はストップし続けました。国鉄が3週間余り動かなかったら日本ではいかなることになるでしょうか。また一度動かした列車をとめることは日本では可能でありましょうか？それに二人目から安くなるという制度は日本にもあるでしょうか？

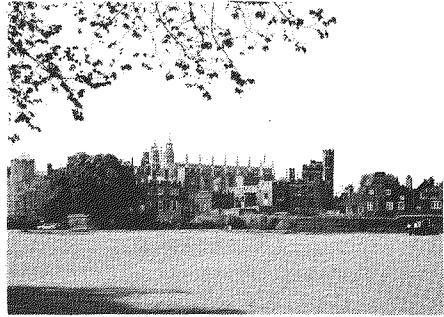
以上いろいろな現象を並べましたが、この背後にかくれているイギリス人の哲学は一体何でありましょうか。私はそれを「のんき哲学」と名付けたいと思うのです。人々は実にゆったりとしたものです。そして住み良いのです。しかし国単位でこんなことをやっていたとすれば非能率きまわりないのは目に見えている。私などはすぐに「日本とイギリス、どちらが良いか」などと行司みたいな気持になるのです。」

以上が斎藤氏の便りのあらましです。今後 学生の なかに 英国を 訪ずれる 方も多いと思います。英国の国鉄はこの他に種々の割引があるのです。よく駅でしらべて切符を買って下さい。同じ往復切符でも当日に帰って来る場合はずうっと安くなるのです。又オペラを始め演劇でも開演の間際は切符はずいぶん割引されるのです。ご参考までに……

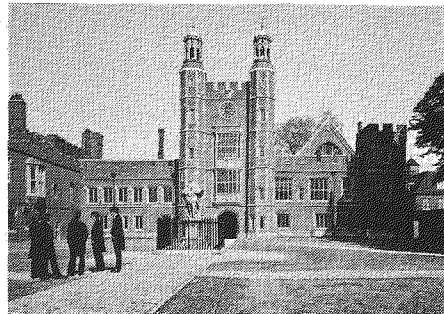
Ⅵ. 大学のある町と大学町



OXFORD
The City Centre



ETON COLLEGE
View from College Field



ETON COLLEGE

「日本人にとって外国とはアメリカである。ヨーロッパ諸国は異国であるようだ。」といった記者があります。日本は明治の始めに近代国家をつくる際に諸外国から諸制度を輸入しました。その際に統一的総合的輸入計画を立てていなかったのはA国からB国からと乱雑にa, b, c……を寄せ集めた近代国家になったといわれます。たとえば郵便と鉄道はイギリスから輸入し、旧日本陸軍はフランスないしドイツから輸入しました。旧日本海軍はロイヤル・ネイビーイギリス海軍の完全なコピーでした。大学の場合はアメリカ式であってイギリス式でないといわれます。大学町とは何かという質問に対して大部分の日本人は大学のある町と答えるでしょう。だからたいがいの日本人は次のような三段階の推論をします。大学町とは大学のある町である。オックスフォードやケンブリッジは大学町である。ゆえにこれらの町には大学があると。

このような推論にもとづく先入観でオックスフォードやケンブリッジの町を訪れた人は、すっかりあてはずれであったことを知ります。少なくとも英国では大学町とは「大学のある町」ではないことをさとります。

オックスフォードやケンブリッジに行った人は、町のどこに大学があるのだろうと不思議に思うのです。大学は町の特定の場所にはありません。大学は町の中に散在しているのです。したがって町の中に大学があるのではなくて、大学の中に町があるのです。町全体が大学であって、大学の建物と建物とを結ぶ道路ができてその両側に店ができて町になったのです。ずい分アメリカ化されたとはいえ、オックスフォードやケンブリッジは基本的には英国の大学町です。67頁のオックスフォードの写真は大学町の全ぼうを示めています。

英国でも新設大学はほとんどすべて、多かれ少なかれアメリカ式といわれます。アメリカ式では、町の一角ないし郊外にキャンパスと称するインテリの城があるわけです。私はイングランド・ウェールズ・スコットランドの都市をまわった時に、できるだけその都市の大学を訪れました。たしかに大学は町の郊外または町の一角にあり、前述のオックスフォード、ケンブリッジとは趣をことにしていました。研修をうけたレディング大学もレディング市の郊外の広い森と湖のある地域をしめていたのです。

Ⅶ. 石の文化と紙の文化

アメリカの文化を紙の文化、ヨーロッパの文化を石の文化とたとえる人がいます。使い捨てのできる紙コップ、お皿、紙おむつなど豊富な資源と廃棄物を捨てる土地をアメリカは持っています。確かに自動車がアメリカ文明のチャンピオンであることも、耐久消費材といわれる「三種の神器」がアメリカの暮しを代表していたことも事実であります。しかしもっとも消費哲学を象徴している意味では「紙」ではないでしょうか。アメリカの食は紙皿、紙コップ、ふきん、手ぬぐいにかわる紙タオルあげくのはては病院での紙ガウンを着せられ紙シート、カヴァーまで紙にとってかわっています。紙こそ大量消費時代の代表的旗手でありました。「消費は美德、使い捨てこそ合理的」という言葉が私たちのまわりにあり、それが大企業を喜ばせ、海をヘドロで汚し、しかも資源小型日本に一番不向きな生活方法であることを私たちが身にしみて体験したのはついこの間のことです。

アメリカのような広い国土なら使い捨てた紙を捨てる場所はまだ予見できる

英国研修の旅

かもしれません。狭い日本では富士山の上までゴミや空かんで一杯になってしまうでしょう。私たちは一番異質のアメリカ型文明の後を、追いかけていたのでは、いつれ息切れがする運命が待っているかもしれません。木や紙はもともと使い捨てられる性質のものである。それだけに大理石より貴重品であるべきだというのがヨーロッパの常識の一つです。石のようないわば小まわりのきかない文明では、一日ごとに進歩するテクノロジーの革新についていけない。アメリカや日本の挑戦の前にヨーロッパ自体が自信を失い始め、ECの結成を促した裏の要因の一つであったことも事実です。ヨーロッパの各地にある教会・ギリシャのアクロポリスやゼウスの神殿にも堂々とした石の柱がたっています。石はヨーロッパそのものであり、ヨーロッパは石の文化であるといえるわけです。石の文化の中で暮らすと、人間は過去の伝統というものをたえず意識する一方、未来も突然異変ではなく、現在の延長上にあるという事実を自然に悟るようになるというのも、もっともだと思います。

石の文化には変化は急激に起りません。私は昭和36年にローマ・パリ・ロンドンを始めて訪れました。その後、数度これらの都市を訪れて、そのたたくまいが、少しも変わっていないのに驚きと又懐かしさ、安らぎを感じました。パリもローマもその町の伝統的趣きを変えるような建造物を建築することは許されないそうです。ロンドンも過去にペストの大流行（1665年）ついでロンドンの80%を灰にする大火（1666年）にあいました。その復興にあたり耐火材を使用することになったのが、今に見るロンドンの豪華さの基盤になったといわれます。ビクトリア王朝の黄金時代を経て世界の都ロンドンに発展しました。二度の大戦で世界の都ロンドンの座は移り、市当局の大がかりな都市計画の実行の取りくみでロンドンは徐々に様相を変えつつあるといわれていますが、その町のなかにローマ軍団の砦のあとを始め、歴史的な価値のある建造物が立派に保持されています。ビクトリア駅の大ドームは、明治時代に伊藤博文一行が訪英した当時のそのままの威容があるのです。私たちがいましたレディングの町にも、1600年代の家が今も現役として存在し、新旧が調和して美しい街並をつくっているのです。今ここでもう一度、斎藤栄二氏の便りを紹介することにします。

「私たちのいるレディング大学はロンドンから列車で30分ほどのところにある、小さな湖とゆたかな森に囲まれた美しい大学です。レディングの町は、いろいろの意味でイギリスの典型的な町といわれています。多くの社会学者が、調査

の対象として取り上げるそうですが、それは住んでいる人種、職業的階層、町の規模、歴史的遺産などを総合してみると、きわめて平均的なイギリスの町となるからなのでしょう。町の不動産屋をのぞいてみてまず驚くのは、家につけられている名前です。エドワード王朝風の家、わらぶき屋根の家、ビクトリア王朝風の家、ジャコビアン風の家など調べてみますとジャコビアン風が1600年代、ビクトリア風が1800年代、エドワード風でも今世紀の始めです。1600年代というと日本ではそれこそ天下分け目の関ヶ原の合戦のころではありませんか。そのころの家が近代的なアパートの写真などと肩を並べて現役として不動産屋に並んでいるのですから、驚きを通りこしてあっけにとられてしまいます。だから私が次のような質問を勇気を鼓舞してしたとしても日本人の皆さんは笑わないでくれるだろうと思うのです。「これらの家は現代の建築材料を使って昔風に建てられたのですか？それとも本当に昔の建物なのですか？」

今度はイギリス人がなぜそんなことを聞くのかわからないというわけです。こういった古い家は特別なものでなく、普通の人が自分の住む場所と考えられているごくあたり前の家なのです。数をたくさん望むより、一つ一つのものを丁寧に造り、それを大事に扱うというのはこの国では当然のことなのでしょう。イギリスは古いものと新しいものが不思議な調和を見せている国です。

日本とイギリスの戦後を比べてみますと、どちらが戦勝国なのかわからない程、わが国は発展しました。私たちはもはやイギリスから学ぶものがないような気がしていますが、そうでないのかもしれない……。一軒一軒デザインの違う美しい家を眺めながらそんなことを感じています。」

斎藤氏たちとレディングにいたる間に、私はこの国の人たちが家そのものに価値をみとめて購入していることを知りました。私たちは、家という建造物はやがて腐食していくもの、家よりも土地に価値を見いだしてマイホームを購入しているのです。戦災をうけたあと、高度成長を迎えて、今度は超高層ビルやマンションなど石づくりの家をどんどん建てだしています。日本人はおまけにせっかちなので、一度作ってしまうとなかなかこわせない石づくりのものを、美観もなにも考えないでたちまち作りあげてしまいます。ヨーロッパの人たちは、東京や大阪で建造物の高さと同じ目の上を、自動車道路が縦横にまじわっていると聞いて信じないでしょう。美しいものを人一倍あこがれる日本人が世界一？みにくい都市をつくるという矛盾撞着は私たちに、石づくりの永続的な文明を息ながく作りあげるという伝統がないためでしょうか。それとも台風、地

英国研修の旅

震など天災を毎年こうむる風土が私たちに永続的なものを指向させないのでしょ
うか。勤勉で、物欲もそんなにさかんでない私たちが、勤勉さのゆえにエコ
ノミック・アニマルと酷評されるのも、また悲しむべき矛盾といわねばなりま
せん。石づくりの文明を正面から見つめつついろいろの思いが胸を横ぎりまし
た。

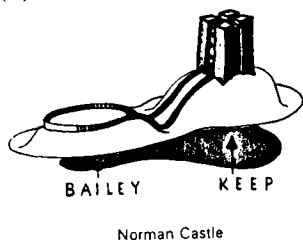
VII. 倹約とケチと旅行

ものにはいろいろないい方があります。倹約とケチはその一例です。自分の
ことは倹約家という人でも他人のことであると「ケチ」といいます。他人の倹
約はケチに見えるのでしょう。日本人にくらべると英国人は「ケチ」または倹
約家ということになります。レディング大学のブリッジズ・ホール（学寮）で
はバスタオル（大判と中判）を一週間ごとに取りかえてくれました。もちろん
清潔にクリーニングはしてありますが、日本ならばどの家庭を探しても見つか
らないような古いタオル、おそらく雑布か廃物として捨ててしまうような古い
タオルでした。個人の家庭でも電球—私には電灯とはいえないのです—は暗く、
それも文字が見えない位にあたりが暗く暮れないと電球をつけません。テレビ
も部屋の電球を消して暗い所で見ています。浴室のお湯も一人が一定量つかっ
てしまうとあとは水が出てくるのです。気候が乾燥していますし、夏といっ
ても日本の初秋のようですから、シャワーで十分であるのかもわかりません。熱
いお湯にゆっくりつかって疲れをとるなどということは、ヒルトン・ホテル級
のホテルならともかく中級クラスのホテルではボイラーの能力以上に大量
（？）のお湯を使うとあとの人は水がでてくることになります。旅の疲れをお
風呂で、ゆっくりと取り去るなどということはできませんでした。さすがに大
学の寮はいつでもふんだんにお湯が出ました。これもホスト・ファミリーにい
わせると税金で支払っているからいくらでもムダに使えるのだといっていまし
た。ホテルでも入口のドアをしめるとその部屋の電灯が全部みごとに消えまし
た。日本でも今、東京の新宿にこのようなビジネス・ホテルがごく最近でまし
ましたが……しかしこのようにつつまじやかな人達も、毎年夏がくるとバカンス
でイギリスを離れて海外に一週間あまりでていきます。私のホスト・ファミリ
ーも今年の夏はベルギーに出かけました。この家族は熟年夫婦の二人暮らしで
したが毎年、海外に出でかけてその国のブランデー、ウィスキーなどを買って
来て部屋の戸棚に美しく飾っていました。クリスマスなどのパーティで親類、

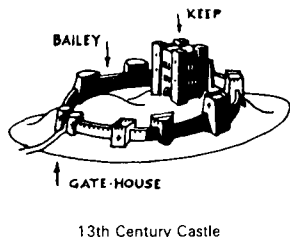
友人たちと一緒に楽しくあじわうそうです。この人たちの儉約は何のためにあるのでしょうか。海外とまでいかなくてもキャンプ場がいたる所にあります。広いキャンプ場には洗面所、水洗トイレ、シャワー室、売店、子供の遊び場があり、日本のように紙屑や空かんやゴミがちらばっているキャンプ場と違ってとても清潔です。バカンスの期間も日本のお盆のように短かくはありません。日数はそれぞれによって違っているとしても、最長の有給休暇は5週間もあるということです。私がお世話になったホスト・ファミリー夫妻は本当につつましい生活でした。奥さんは週に二回パートに出かけています。夫がパンを買い自分はジャムバターを買うという表現で助け合っている共働きの生活を説明してくれました。それでも広いゆったりとしたマイホームを持ち、家の前庭と後庭には美しい花を咲かせ、日常の野菜類は自家栽培でした。一見ゆたかに見える日本人よりも、もっと奥深い余裕を持っているように思えました。

Ⅸ．ウェールズの城めぐり

(1)

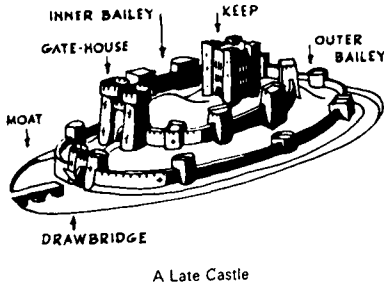


(2)



イングランド、ウェールズ、スコットランドのいずれの地方にも侵略民族を迎え討って抗争を続けた負けじ魂をしめす城があります。ロンドン市内にあるロンドン塔も城でした。この稿ではウェールズ地方の城めぐりの旅について書いてみます。城めぐりの旅をしても、つくづく感じたことは石の文化と紙——ここでは植物の文化といわせてもらいます——の違いでした。ヨーロッパの城は歴史的記念や観光などの目的から修理・復元がなされている場合は別として外観は建造物が完全に残っているようにみえても、その内部は全く廃虚になっている場合が多いようです。それはヨーロッパの城が全体的に石材かレンガが築城資材として使用されているからです。城は元来、軍事

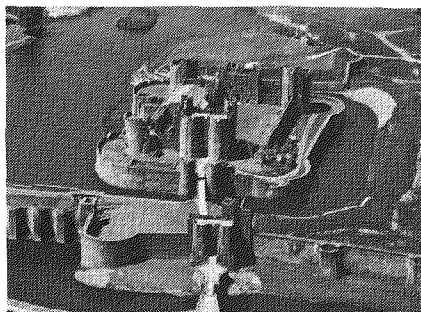
(3)



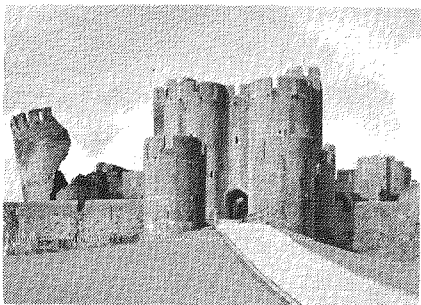
的な価値を第一義としています。したがってその景観は他の建造物と異ならない。城の景観は他の建造物の美観を無視するところに生れる、これがヨーロッパの城に一貫してみうけられるといわれます。それではヨーロッパの城の美観はどこにあるのでしょうか、それは城壁と塔の調和にあるのです。ヨーロッパの城は全体として直線的であり堅牢なまとまりを示めしてい一個の完結した姿があります。

日本の城はどうでしょうか、基礎工事としての石垣と、その上に築かれた木造白壁の塀ややぐらの上下二段の建造物からできており、それを切り離すとその存在性が失われるといわれています。上部構造としての木材と壁の部分はやがて消滅して石垣と濠だけが残るのです。日本の城は種々な築城資材の調和的な使用でもあきらかなように自然との調和を特色としています。おそらくこれは木造建築の持つ本来の特色といっていでしょう。石材やレンガで固められたヨーロッパの城は、その出発からして自然への対立でありまた離脱であり、そんなところに西洋的な積極性がうかがえる。ヨーロッパの城は自然地形を人力で克服したのに対して日本の城は自然地形と順応する傾向が強いといわれます。またヨーロッパの城の特色は同一素材の統一の美であり、日本の城は異質的素材の調和にあります。石垣と濠だけの城跡は荒涼とした廃虚の美であり、それに対して外観だけになってもその存続を主張するヨーロッパの城は力強くその存在性を示す美しさがあります。

英国で数多くの城をみて石材の建造物の力強さ、粗野で殺風景なまでの堅固さを感じました。日本の城の天守閣の美観に対比するのは天守閣と同じような機能を持つキープと呼ばれる主塔といえるでしょう。例えばロンドン塔のホワイト・タワーのようなものです。しかしイギリスの城のなかにはキープのない名城もあります。そのような場合は他の塔、たとえば門塔、や特別な壁塔がキープの役目を果しているようです。英国の名城のなかより、カーフィリー・カーディフ・カーナホン・コンウエー・ハーレックの五つの城を取りあげてみました。前頁の(1)(2)(3)の図形は英国の城の歴史的変化を示めています。

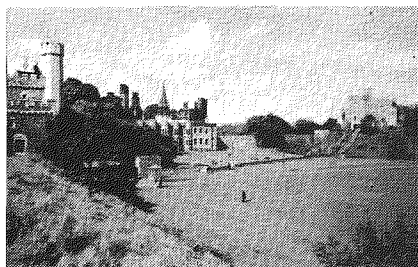


Castell Caerffili,



Castell Caerffili,

りには私たちのグループ数人しかいないのです。車から乗りて夕映えにはえる城の濠の城壁を心ゆくまで歩きました。傾斜塔内から戦のおたけび・甲冑のふれあう音が聞こえるような気がしました。



CARDIFF CASTLE

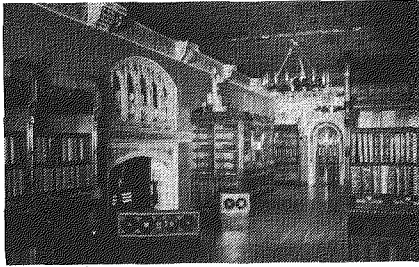
カーフィリー城

南ウェールズにあるこの城は、13世紀後半にグラモーガンの領主ギルペール・ド・クレールが築いた城です。城は湖と水濠で取り囲まれた二重の城壁を備えた同心円的型式の囲郭を持ち、イギリスの同型式の代表的な城といわれています。この城を有名にしているのは「傾斜塔」です。これは14世紀のエドワード2世とその妃イサベラ両党の戦いの際に火薬で城を攻めたことから破壊され傾斜したまま数百年の間、倒れることなく立ち続けているのです。この戦い以来、城は廃虚となり再び栄光は取りもどすことはありませんでした。私たち一行がカーフィリー城についた時は丁度あたりは夕日が沈み始め薄もやがたちこめていました。

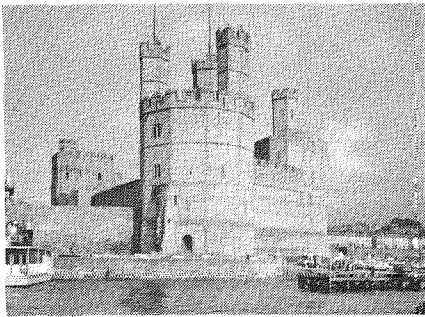
ただでさえ静かな週末の英国です。あた

カーディフ城

カーディフはウェールズの首都で、中央にカーディフ城が堂々とした威容を誇っています。西暦75年ごろのローマ人の砦から始まって続いてウェールズ人の城となり、幾多の興亡の末に19世紀後半から本格的な改修が行なわれて現在の姿となりました。現在の城壁はほぼローマ時代に構築された線に沿って修復されたものだといわれます。城の内部の参観はガイドによって行なわれ、ユーモアをまじ



CASTLE CARDIFF.



Castell Caernarfon,

ようになりました。大手門であるキングズ・ゲートは町に向って開かれており町は城の外郭的性格を持っていました。東側は搦手門ともいべきクインズ・ゲートと呼ばれる門があります。カーナホン城は城の基底部と川面の落差が少ないためか、水面に浮いたように見えます。イーグル・タワーと呼ばれる塔や今も残る城壁の威容は一見の価値があります。



Conwy Castle,

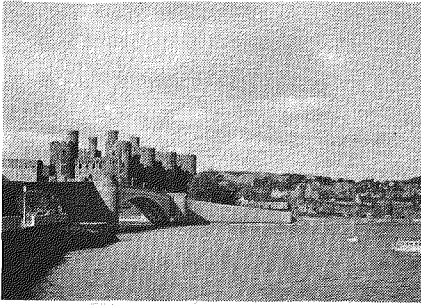
えた説明は、1時間余りの城内回遊を退屈させません。希望者は結婚式をこの城内の広間で挙げる事が出来るそうです。

カーナホン城

カーナホン城は北西ウェールズのメナイ海峡にある港町です。町の手寄りに城壁で囲まれた中世の自治都市のたたずまいを残す一区があり、カーナホン城はその南端の海に突き出ている低い岩場の上にあります。現在の城と町の城壁の大部分は13世紀にエドワード一世が北ウェールズに対戦した直後に造られ、その後に大規模な修復が1294年に加えられました。エドワード一世の皇太子がここで誕生したことから後にはプリンス・オブ・ウェールズという称号は皇太子を意味する

コンウェー城

コンウェー城は北ウェールズのコンウェー市にあります。コンウェー市は北ウェールズ最高といわれる魅力的な存在でその城はエドワード一世がウェールズ地方に築いた、いわゆる六名城（カーナホン、フリント、ハーレック、ボーマリス、ロードラン）の一つです。13世紀の古城、21カ所の塔を並べた城壁は



Castell Conwy,

でなく、市の内部に対しても警戒の姿勢を持っていたことになります。



Castell Harlech,



Castell Harlech,

有名です。市を囲む城壁は中世では城と完全に連結していましたが、この頃には城と市とは水濠により完全に隔てられていた。外から城に行くには、まず市の城門を通り市街を通り抜け城の門に達するわけです。結局、市の区域は城の外郭になっていたことになります。このことは城は市の外方からの攻撃者に対してだけ

ハーレック城

この城はエドワード一世が1283年頃から築き始め約7年間で完成した城です。城の内部は二重の城壁で同心円的に囲まれ、部分的に塀が設けられています。正面入口には雄大なゲート・ハウスがキープの役割をかねて設けられています。ウェールズの新征服地を保持するために設営された諸城のなかでも最も堅固な城であるといわれています。15世紀のウェールズ人の反乱・バラ戦争の時の籠城などの歴史の跡を残しているが、この城の降服はいずれの攻防戦でも城内の流行病・飢餓のためのものであり、このことが築城的な欠陥のない名城であったことを推察させます。ここではウェールズにあるいくつかの城の紹介でおわりますがイン

グランドにはウインザー城・ウォリック城、スコットランドにはエジンバラ城・スターリング城・ブレイマー城・ヨーク城など数えきれない程の古城・名城があります。今でも目の前に浮かんでくる印象深い城の一つはネス湖の岩壁にくずれんばかりに立っているウルクハートの廃城です。ネス湖（長さ24マイル幅1マイルのひどく細長い湖）を吹き渡る風の音、あたりをおおう夕闇、ロ

ーレイの歌がなくても旅人は岩壁づたいにその古城に足をふみいれたい誘惑に駆られます。英国の城を訪れる時には前もってイングランド・スコットランド・ウェールズを舞台にする王家の興亡を知っておく必要があります。海外語学研修に短時間で、でかける学生の数も相当あります。その国の文化をぬきにして語学だけの勉強などは無味乾燥と思います。渡航前にその国の勉強を是非しておきたいものです。

X. おわりに

敗戦直後のアメリカ映画に「花嫁の父」という作品がありました。電機冷蔵庫・車・各種の家庭電器製品・電話など一通りそろっていて、お手伝いはいない家庭。典型的な中産階級の物語りになっていました。敗戦国民の日本人にとって夢のような、天国そのもののように思えた生活、風俗がそこにありました。物質生活の豊かさに目をうばわれ、このような生活こそ理想であると追い求めたのも無理のないことでした。アメリカにこそ私たちの求めるものがあり、戦後の日本人の目はアメリカに向って注がれたのです。アメリカに関する情報は過密なほどに提供されています。フルブライトの留学生だけでも5600人にのぼる各界の指導者が太平洋に渡り、私費留学生となると正確な数字があまりつかめないほどの多さです。マスコミで伝えられる外国はほとんど全てアメリカのことについてといっても、オーバアではありません。より正確に言えばアメリカというレンズを通して見た世界像といってもよいくらいです。河合俊三氏は戦後わが国がアメリカから輸入した制度・風俗・習慣のなかでまったく猿真似の域をでないものが数多くある。その一つは議会政治であり、6・3・3・4制の教育制度がもたらした駅弁大学であり、また調査研究の結果をなんでもかでも統計グラフに表示したがる傾向などとあげています。河合俊三氏にいわせれば私たちのアメリカに対する認識もすこぶるたよりないものがあるといえます。ヨーロッパに対する認識はかなり重症であるといわれます。

私は石の文化と紙の文化または植物の文化という表現を幾度かつかいました。一国の文化を考えるとときにその風土をぬきにして論ずることはできません。風土に関する限りヨーロッパは神の恩寵を一身にうけた感じがあります。たとえばパリやロンドンは緯度でいえばサハリン（もとの樺太）に当るくらいの北国でありながら、サハラ砂漠とメキシコ暖流のおかげでサハリンよりずっとしのぎやすいのです。しかも梅雨が高温の夏に訪れるわが国と違って冬が雨期にあ

たので同じ寒さでも、身をきられるような寒い空っ風が吹くということはありません。夏は夏で乾燥しているので日蔭は涼しく気温が高くてもずっと楽です。私も初冬・早春・盛夏と英国を訪れましたがそのすどしやすさに目をみはりました。特に夏は日本の初秋のようでした。イギリス紳士のみだしなみのよさもこの風土からくるわけです。地震は無縁・台風もなくしたがって耐震建築の必要も、高温、多湿や風雪にとまなう建物のいたみも計算にいれなくてよいわけです。英国人だけでなくヨーロッパの人たちの間には物は長持ちするという考え方が根底にあり、だからこそヨーロッパの人は物をため、大事にするわけです。こんな話があります。ステンドグラスを売る店の主人がステンドグラスの値段が高すぎるといった買手に「このグラスの色は千年たっても少しも変わらない。千年でこの値段を割ってみると安いものだ。」といったのです。日本人の誰が千年単位でものを考えるでしょうか。

日本は湿度と気温が高く物が腐りやすい条件がそろっています。その上に植物文化です。日本の衣食住の殆んどが植物にたよっています。植物を材料として作られた品物の寿命が短いのは仕方ありません。しかも毎年のようにやって来る台風が存在があります。何事も台風シーズン前までにやってしまわねばならない。畑仕事も土木工事も。世界の人が驚く突貫工事も台風と関りがあると嘆く人もあります。私たちがせっかちで、だから何をするにも応急手当的なことが頭に浮びます。国民性はその風土が作り上げたものであるということは一理があります。しかし国土は不変でも私たちをとりまく環境は変わってきました。新しい材質を用いることで耐久性を伸ばすことができるようになりました。狭い国土・資源のない国土では使い捨ての文化は自滅につながることは、はっきりとしています。今ここでせっかちな私たちは足をとめ、わが国をとりまく近隣各国そして遠く東西に目をむけてみる必要があると思います。この稿が海外旅行にでかけられる学生の方にもなにか寄与するものがあることを願っております。また私に貴重な体験の機会を十分に活用できるように配慮して下さいった学長を始め同僚の諸先生・大学当局の方々にごこであらためて感謝の言葉を述べ稿を終ることにします。

参 考 文 献

- 河合俊三『当世洋行ばやり：日本人の国際感覚』毎日新聞社
カーカップ，ジェイムズ『沈みゆく老大国』英潮社
木村治美『黄昏のロンドンにて』白鳥出版
『イギリス（世界の国シリーズ）』講談社
レゲット，トレバー『紳士道と武士道』サイマル出版会
森嶋通夫『イギリスと日本：その教育と経済』岩波書店
ミルワード，P．『イギリス人のことばと知恵』朝日イブニングニース社
ミルワード，P．『イギリス風物誌』大修館
佐伯智義『ヨーロッパ再発見』講談社
植村雅彦『エリザベスとその時代：イギリスの夜明け』創元社

Book of British Towns. Drive Publications Limited.

Housego, Fred. London, *A Portrait of Britain's Historic Capital.* Italy.

Penogre, John & Ryan, Michael. *The Observer's Book of Architecture.*

Frederick Warne Ltd.

Thomas, Royer. *The Country Life Picture Book of Wales.*

Tweedsmuir, Lord. *The Country Life Picture Book of Scotland.*

Wilson, Michael I. *The English Country House And Its Furnishings*

Hong Kong:

**Report on the Japanese University Lecturer's Course in English
and Language Teaching at Center for Applied Language Studies (CALS)
University of Reading**

MINEKO TSUKIYAMA

Period of the Course : July 5th - August 26th 1982
 Period of Free Study Trip : August 27th - September 7th
 Number of Participants : 15 (7 Private Univ., 8 Government Univ.)
 CALS Staff-Teaching : David Wilkins, Director
 Ron White, Director of Courses
 Jon Roberts, Course Leader
 Keith Johnson
 Pauline Robinson
 Gill Sturtridge
 Ed Williams
 Clare Furneaux
 Gail Langley

Guest Speakers

Week	1	Jeanette Martin	Local historian
"	2		Professional actor
"	2	Prof. D. Crystal	Linguistic Science Dept., University of Reading
"	2	ELTJ Panel	Various
"	3	Prof. F. Palmer	Linguistic Science Dept., University of Reading
"	3	Mr. A. Roach	Warden, National Trust
"	4	Mr. R. Mannings	Careers Advisory Service and School of Education, University of Reading
"	5	Mr. R. Davies	School of Education, University of Reading
	6	Mrs. R. P. Hilary	RSA Assessor and freelance teacher trainer
"	6	Mr. D. Brazil	Dept. English Language and Literature, Birmingham University
"	7	Mr. C. Poole	Conservative Association Agent, Reading

Excursion Programme

Week 1	Saturday July 10th	Stratford-upon-Avon and "Macbeth" at R.S.C.
Week 2	Wednesday July 14th Thursday 15th	London and theater Country Dancing
Week 3	Sunday July 18th Friday July 23rd	Bath Cliveden/The Wyne
Week 4	Tuesday July 27th	Oxford
Week 5	Wednesday August 4th	Eton College and Windsor
Week 6	Friday August 13th	Winchester and Chawton
Week 8	Tuesday August 24th	Parliament
	Wed/Thur 25th/26th	Kew/Other Local Gardens trip

Timetable

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS COURSE

WEEK 1

JULY	MONDAY 5th	TUESDAY 6th	WEDNESDAY 7th	THURSDAY 8th	FRIDAY 9th	10th SATURDAY
9.00 - 10.00	Orientation	L.I. Listening activities	L.I. Listening activities	L.I. Listening activities CF	L.I. Listening-Fluency Visiting Stratford CF	Stratford
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	dep 9.00 CALS
10.30 - 11.20		↓ CF	↓ CF	Varieties PCR	↓ CF/JR	Dep 7.00 Stratford EW, CF
11.30 - 12.20	↓ JR/CF	L. I. Oral Fluency activities JR/CF	L. I. Oral Fluency activities JR/CF	↓ JR/CF	↓ JR/CF	
2.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	11th SUNDAY
14.00 - 15.00	Trip into Reading ↓			Life in Britain News Survey CF	Reading: The Past Jeanette Martin Local Historian	
15.00 - 16.00	↓ CF			↓		
		Tea with the staff 1.9				

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS COURSE WEEK 2

JULY	MONDAY 12th	TUESDAY 13th	WEDNESDAY 14th	THURSDAY 15th	FRIDAY 16th	17th SATURDAY
9.00 - 10.00	D.E. Varieties RVW	D.E. Varieties RVW	London and theatre Dep CALS 9.30 RM/CF	L.I. Listening activities	L.I. Listening - Fluency Visiting Bath CF	
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	D.E. Prof David Crystal Current English	L.I. Listening activities		↓ CF	↓	
11.30 - 12.20	11.30 - 12.00 Follow up 12.00 - 12.20 Business CF JR	↓ CF		L.I. Oral Fluency Activities CF/JR	↓ CF/JR	
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	18th SUNDAY
14.00 - 15.00	L.I. Listening CF/GS	A.L. Communicative Language Teaching An Introduction to Writing		Life in Britain A Professional Actor	A.L. Panel English Language Teaching Journal FURS Large Lecture Theatre	Bath dep CALS 9.30
15.00 - 16.00	Oral Fluency Activity	↓ KJ		↓	↓	dep Bath 5.00 (with French group) + PCR, JR, EW
			Dep London 10.30	8.30 - 11.00 Country Dancing J.C.R.		

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS COURSE WEEK 3

JULY	MONDAY 19th	TUESDAY 20th	WEDNESDAY 21st	THURSDAY 22nd	FRIDAY 23rd	24th SATURDAY
9.00 - 10.00	L.I. Listening activities CF	L.I. Listening activities CF	L.I. Listening activities CF	L.I. Listening activities CF	L.I. Listening/Fluency ↓ CF/JR	
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	D.E. Cohesion and Coherence	D.E. Varieties ↓ PR	L.I. Oral Fluency Activities ↓ CF/JR	D.E. Varieties ↓ PR	11.00 D.E. Modality Prof F Palmer	
11.30 - 12.20	12.00 - 12.20 Business JR	↓	↓	↓		
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	25th SUNDAY
14.00 - 15.00	L.I. Fluency activities ↓ CF/JR	Life in Britain The Work of the National Trust Mr Alistair Roach Warden	/	L.I. Oral Fluency Activities ↓ CF	Visit to a National Trust Property Dep 1.15 CALS JR	
15.00 - 16.00					↓ Return approx 6.00	

JULY	MONDAY 26th	TUESDAY 27th	WEDNESDAY 28th	THURSDAY 29th	FRIDAY 30th	31st SATURDAY
9.00 - 10.00	L.I. Oral Fluency Activities JR	Visit to Oxford Dep CALS 9.15 EW	L.I. Oral Fluency Activities JR	L.I. Oral Fluency Activities JR	L.I. Oral Fluency Activities JR	
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	D.E. Cohesion and Coherence PR	Included - guided tour of Oxford	D.E. Varieties ↓	D.E. Varieties ↓	D.E. Cohesion and Coherence ↓	
11.30 - 12.20	12.00 Business and mid-course Review JR		↓ PR	↓ PR	↓ PR	
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	SUNDAY
14.00 - 15.00	Life in Britain Sixteen Plus Mr Ray Mannings		Oral Fluency Activities ↓	Oral Fluency Activities ↓		
15.00 - 16.00	C.A.S. and University of Reading		↓ JR/GS	↓ JR/GS		
		Arrive CALS 6.00p.m.				

AUGUST	MONDAY 2nd	TUESDAY 3rd	WEDNESDAY 4th	THURSDAY 5th	FRIDAY 6th	7th SATURDAY
9.00 - 10.00	D.E. Varieties RW	D.E. Varieties RW	D.E. Varieties ↓	A.L. Communicative Language Teaching JR	D.E. Cohesion and Coherence ↓	
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	D.E. Cohesion and Coherence JR	A.L. Communicative Language Teaching Preview ↓	↓ RW			
11.30 - 12.20	↓	↓ JR	Visit to Eton College and Windsor Castle JR		↓ JR	
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	8th SUNDAY
14.00 - 15.00	A.L. Communicative Teaching: review of Language Improvement	A.L. Language Teaching in Japan Aims and Constraints			Life in Britain The Education System Schooling ↓	
15.00 - 16.00	Weeks 1-4	(discussion led by JR)		↓	Mr Ray Davies University of Reading	
			Return 5.00p.m.			

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE

JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS COURSE

WEEK 6

AUGUST	MONDAY 9th	TUESDAY 10th	WEDNESDAY 11th	THURSDAY 12th	FRIDAY 13th	14th SATURDAY
9.00 - 10.00	A.L. Aspects of Communicative Language Teaching	A.L. Aspects of Communicative Language Teaching	A.L. Aspects of Communicative Language Teaching	DE/AL Intonation David Brazil University of Birmingham	Visit to Winchester GL	
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	↓ H R-P	↓	↓		includes guided tour of Winchester Cathedral and Jane Austen's house at Chawton	
11.30 - 12.20	↓ 12.00 Business	↓ H R-P	↓ H R-P		dep. 9.15 CALS	
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	15th SUNDAY
14.00 - 15.00	Life in Britain					
15.00 - 16.00				↓		
					Arrive Reading 6.00p.m.	

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE

JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS COURSE

WEEK 7

AUGUST	MONDAY 16th	TUESDAY 17th	WEDNESDAY 18th	THURSDAY 19th	FRIDAY 20th	21st SATURDAY
9.00 - 10.00	A.L. Uses of the Language Laboratory JR	Uses of the Language Laboratory H R-P	A.L. Aspects of Communicative Language Teaching JR	A.L. The Writing Skill? KJ		
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	↓					
11.30 - 12.20	↓ 12.00 Business JR					
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	22nd SUNDAY
14.00 - 15.00	Life in Britain The Duties of an M.P.	↓	↓	↓		
15.00 - 16.00	Chris Poole Agent and Sec. Reading Conser- vative Association	↓	↓	↓		

CENTRE FOR APPLIED LANGUAGE STUDIES

TIMETABLE

JAPANESE UNIVERSITY LECTURERS' COURSE WEEK 8

AUGUST	MONDAY 23rd	TUESDAY 24th	WEDNESDAY 25th	THURSDAY 26th	FRIDAY 27th	28th SATURDAY
9.00 - 10.00		Visit to London and House of Commons JR	A.L. The Writing Skill KJ	Presentation of participants Projects JR		
10.00-10.30	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	COFFEE	
10.30 - 11.20	A.L. Communicative Language Teaching Review JR					
11.30 - 12.20						
12.20-2.00	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	LUNCH	SUNDAY
14.00 - 15.00						
15.00 - 16.00						
				Farewell party for JUTC 8.00p.m.		

APPENDIX I

SUMMARY OF COURSE PROGRAMME

	Unit Topic	Language Improvement		Description of English *		Applied Linguistics * *				Life in Britain
		Listening Oral		Varieties Coh & Coh		writing	language	Intona- laboratory	"Aspects"	
week 1	5 hr	6 CF	4 CF/JR	2 PCR						4 CF/guest
2	-	6 CF	4 CF/JR	2 RW		2 KJ				1 guest
3		5 CF	6 CF/JR	4 PR	2 PR					1 guest
4		-	8 JR/GS	4 PR	4 PR					1 guest
5			4 RW	5 JR					11 JR	1 guest
6								5 DB	9 H R-P	1 guest
7						5 KJ	8 JR/HRP		5 JR	1 guest
8						3 KJ			2 JR	

* Week 2 Prof Crystal - I ** Week 2 ELTJ Panel - 2

I. GENERAL COMMENTS

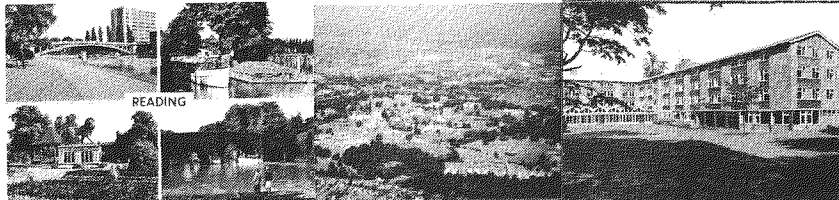
This summer course has been programmed by the Center for Applied Language Studies of the University of Reading for several years with support from the Tokyo British Council and the Ministry of Education in Japan. Our course was the sixth and it had three main aims: firstly to help us up-date our own command of the English language; secondly to extend our knowledge of the life and culture of contemporary Britain; and thirdly to augment our professional skills as English language specialists. People might say that two and a half months is a very short period in which to study a language and culture. However, quality is sometimes superior to quantity. Intensive study makes up for shortness of study time. When the condensed study is presented well and participants can give and take, imbibing and imparting new knowledge, it may be equivalent to a year's study. This proved to be quite true when I studied in Great Britain. In spite of the short period, what I gained spiritually and intellectually, in both academic and daily life, was immense and valuable.

During the first part of the course, I concentrated on extending my listening ability by tuning in to authentic English. I learned about various aspects of contemporary English, including the range of dialectal and stylistic features which characterized the living language. Just as not all Japanese people speak like a NHK announcer, nor do all English people speak like a BBC radio announcer. The majority of people in Japan do not write or read prose like that written by an Akutagawa prize winner or a TV actor or an actress. The same holds true with the people in Britain. The CALS staff helped me to come to terms with the range of English which I encountered in this country and elsewhere in the English speaking world. Like the English language itself, the methodology of teaching is enormously varied, and there is now a huge range of different techniques and procedures to choose from. Hoping that I would find some ideas and would be able to adapt it to teaching in Japan, the CALS staff introduced a broad range of techniques and methods in the teaching of English.

When I had finished every program requested by the British Council in Tokyo I got together at Passfield Hall of London University

with the rest of the Japanese teachers to exchange thoughts about our fruitful experiences in the United Kingdom. I found that almost all of the teachers firmly believed that the sixth course was very successful in every point, and each one of the teachers was satisfied with what was done by CALS and with what we were able to do during our brief stay in Britain. Why was it so successful and fruitful to both the Japanese teachers and the CALS staff? First of all, the screening and the interviewing committees, which consisted of the officials of the Tokyo British Council and the Ministry of Education and certain university professors, selected wisely the participants who were motivated to achieve the three aims planned by CALS. Two thirds of the participants had the experience of studying abroad and were internationally minded. Actually, they were the core of the group of Japanese teachers. Being selected as the liaison committee, they made great efforts to attain fine results for both CALS and the participants. I was very happy to work with them as one of the committee members and to be inspired by their refined personalities, sharing many precious experiences. Next I should mention the enthusiastic but mature attitude of the CALS instructors. Although CALS had confidence in the communicative language teaching method, which we were exposed to during the session, what they tried to do was to know whether it would be appropriate for use in our own teaching in Japan, instead of pushing us to use it. Whenever some doubts arose among us, even the slightest, the CALS team tried to help us settle hidden barriers for its practical use. The relationship between the CALS staff and Japanese teachers was not that of instructors and participants but more like that of close colleagues.

II. READING AND READING UNIVERSITY



READING BRIDGE CAVERSHAM LOCK
FORBURY GARDENS THE BRIDGE, SONNING PLC7223

University of Reading
Aerial view looking west across the University's
parkland campus at Whiteknights

Wessex Hall
One of the Halls of Residence on the Whiteknights
campus of the University of Reading

Reading city is located in Berkshire. It is a market center, a railway junction and a university town. It began its rapid expansion in the 19th century but its history as a settlement stretches back more than 2,000 years. The Romans had farms and villas in the area, and relics of their occupation are in Reading Museum. Reading is especially convenient for visits to other parts of the country. There is a frequent train service to and from London. The high speed trains take less than 30 minutes from Paddington in London. There are express coaches from Reading to central London. The historic cities of Oxford, Bath, Winchester and Stratford-upon-Avon are all within easy reach of Reading. Reading is one of the fastest growing towns in Britain, with the largest private housing development in Western Europe around the southern edges of the town. Reading University consists of some 300 acres of parkland, with a lake and many fine trees and gardens. It is hard to believe that little more than a mile away is the center of Reading, which is a major regional center of about 140,000 inhabitants. The elements from which the University of Reading has grown were first drawn together in 1892, when a University Extension College was established in Reading, based upon the local Schools of Science and Art and upon an earlier Oxford University Extension Center. In 1902 the College qualified for inclusion in the list of Universities and University Colleges in receipt of Treasury grants. Its teaching covered Letters, Science, Agriculture, Dairying, Horticulture, Fine Art and Music. It soon outgrew the original site in Valpy Street and in 1904, largely through the generosity of Mr. Alfred Palmer, the College was able to move to a larger site of about nine acres in London Road, half a mile from the town center, where the buildings are pleasantly interspersed with lawns and gardens. The University has some 6,530 registered students, some part-time, the great majority full-time, and it is likely to remain at about this size. The numbers of full-time students in each Faculty during the Session 1981-82 were as follows. Faculty of Letters and Social Sciences, 2,360. Faculty of Science, 1,521. Faculty of Agriculture and Food, 997. Faculty of Urban and Regional Studies, 619. School of Education, 326. The proportion of men to women in the University is three to two. About 11% of the students

are from overseas, increasing their number in postgraduate courses. There are about 1,800 postgraduate students.

III. ACCOMMODATIONS

For the first four weeks of the session, we lodged together at Bridges Hall, a hall of residence, and living together with the teachers was very helpful for letting us get to know one another. Bridges Hall, opened in 1966 and extended in 1972, is named after the late Chancellor of the University, Lord Bridges. It has accommodation for 460 men and women students on four floors built round two quadrangles with a central Dining Hall, Junior and Senior Common Rooms and Library with a reading room. The building is in Whiteknights on a rise overlooking the University's academic buildings to which it is linked by a cycle path and a bridge over Whiteknights Lake. All study-bedrooms in the Hall are single, fully furnished and centrally-heated. Each contains a bed, an armchair, a desk and a desk chair, bookshelves, drawers, a reading lamp, and a pin-up board. Two thirds of the resident students live in Main Hall round the old quadrangle and are fully catered for and eat in the Dining Hall. One third who live in New Wing, round the new quadrangle, are self-catering and responsible for buying and preparing their own meals. There are local common rooms with adjoining pantries in Main Hall where students may prepare their own hot drinks. While we were there, almost all of the student members were on summer vacation and they were back home except for some overseas students from Asia.

Living with the English families arranged by CALS for the second four weeks, we found quite a wide variety of family life-styles since some of the families had young children, others had children grown-up and away from home, others were widows living alone and so on. The types of occupation were also diverse, such as a university professor, a veterinarian, an accountant, a retired official, a blue collar worker and so on. Some wives went out to work even when there were young children and most husbands took a share in household chores and in looking after the children. It was a really good chance to see and touch cross culture differences through everyday life.

IV. COMMENTS ON SOME SPECIFIC SUBJECTS IN THE COURSE

1. Listening Practice

This was one of the main subjects that CALS wanted us to understand and to extend their ideas in our real teaching situations. The focus of this practice was to comprehend the English which is called "Authentic English". What is authentic English? It is the English spoken by English natives, for English natives, to English natives and among the English natives in their daily communication. The speaking speed is natural to the natives and not the pedagogically natural speed which is quite often used in a class room situation or on a commercially-made tape for English learning. Secondly, authentic English has a lot of conversational fillers such as "well ..." "but ..." "humm ..." and "you know ...", etc. These are psychological signals of what a speaker has inside, that is, hope, hesitation, doubt, anxiety, etc. Redundancy is common in this type of English. Therefore, pauses do not occur regularly like those of written English which are symbolized with punctuation marks. Besides these elements, the English I listened to in the language laboratory at CALS was a very friendly type and monologue type of English. In order to get much clearer understanding why and what CALS was aiming at by assigning many hours for listening activities, we have to know what has happened to students who have come to the United Kingdom for holidays, cultural exchanges, conferences, and also for longer periods to follow advanced courses. It has been said that these students are shocked to find, though they speak English reasonably comprehensibly, they can not understand it. It is not just that they can not understand conversation — this is well known to be a difficulty — but they can not understand the lectures on the courses they have come there to follow. It is quite clear that before they arrive, they have already been exposed to the slow formal style of English spoken on taped courses and they understand this very well. "Slow colloquial" implies that this is a slow form of the speech which people speak every day among themselves. It suggests that normal, conversational speech is exactly like slow colloquial only spoken faster.

So anybody who can follow slow colloquial speech might expect simply to speed up a bit in order to comprehend normal conversational speech. It also suggests that there will be a more formal, more explicit, and more understandable style of speech which one would expect to find used in formal situations like lectures.

Twenty or thirty years ago a student arriving in Britain could expect to hear on the radio and in lectures, the sort of slow, careful English that he had been taught to use. At that time in the universities many lecturers were still reading their lectures from carefully prepared texts. There was still a strong tradition of "styliness" in public speaking and rhetorical flourishes and rotund oratory were much admired. Today, however, the situation has radically changed; with the democratization of the BBC, the universities, and other public institutions, has come a very marked change in the approach of most public speakers. This process is particularly marked in younger speakers. The formal rhetorical style of public speakers has changed to an informal, "chatty" style, in which the speaker attempts to project a friendly, accessible image to his audience. This is true not only of speakers addressing a live audience but also of speakers on radio and television. Even the BBC news-readers, once regarded as the embodiment of perfect spoken English, have followed this general trend.

To tell the truth, when I was first exposed to this type of authentic English, all of my senses seemed to refuse to adopt the flowing stream of the language. But a few hours later, strangely enough I found myself trying to accept the speech and even enjoying it. The controversial point among the Japanese teachers was whether we should introduce this type of English in our classes or not. After a long heated discussion, the idea of the majority was that it might be taught to advanced students but not to other levels of students. My reaction is that we are teaching living English, and if a "chatty" style of speech is the general trend, we have to let our students listen to it and let them realize the changes in speech to a certain extent.

2. Oral Fluency Cohesion and Coherence

Structured practice, role play, communication games and simulations in areas of language use were presented by CALS in the oral fluency courses. The presentations were well organized and very interesting. These methods will surely work out, when the number of students in class is less than 20. Cohesion and coherence is a practical discovery approach to the analysis of the text and we learned how a text book is developed for its teaching — it is developed with a principle such as notional-functional or structural-oriented or grammar-oriented or mixed type of syllabus. It was a fascinating task to analyze a text book to see whether it was well organized or not, but if it had been possible to insert more session for communicative approach to reading and writing skills for the college level, I could have gotten a more thorough understanding of communicative teaching for the four language skills.

3. Lectures and Training by the Guest Speakers

Thanks to the guest speakers arranged by CALS, who always stayed longer than the scheduled hour, we were able to get a general but concrete concept of the United Kingdom in various fields, such as the educational system, the political situation, racial problems, and religions as well as British plays, etc. Among the lectures and training in language teaching, those done by Mrs. Hillary and Mr. D. Brazil were very impressive and remains vivid in my mind. Mrs. Hillary once was a member of the Cambridge Proficiency Examination Committee and has years of experience of teacher-training. It was apparent that her presentations, lecture, and training were based on the communicative approach but we could see that she had studied thoroughly the process of change in the teaching methods that had once exploded all over the world. She knew quite well that any method worked out for beginners but our problem was for intermediate and advanced students. For them only one or two methods are not enough to fit their needs and it is teaching them that demands of teachers something

more than a technique. Mr. D. Brazil is from Birmingham University and his lecture on the intonation of English came from research into the structure of interactive discourse being conducted at the University of Birmingham. According to him, most of the methods of teaching English intonation have adopted, perforce, a piece meal, approach: one pitch contour is said to indicate a speaker's attitude — he is hopeful, doubtful or indignant, another to distributed emphasis in particular way; a third to distinguish one grammatical structure from another. Meanwhile certain other features, notably the placement of the nucleus or tonic, are endowed with a quite different significance and said to indicate what is "new" and what is "given" in the containing text. The impression created in many teachers and learners is that intonation can combine with a speaker's choice of vocabulary and grammatical patterning to create effects of unlimited and unlearnable complexity. In this situation they feel that the most a learner can do is to practise some of the commonest patterns, learn some of their commonest "meanings" and peaks of firm and chartable land emerge. On the contrary, the central importance of his study is to begin with the premise that a view of language as discourse and communication, where utterance value depends crucially on interactive function within the discourse, needs a system of intonational analysis which is distinct from that appropriate to a syntactic and semantic view of language. His approach is to begin from the standpoint of the speaker and his messages — the information he wishes to convey — and to ask how he can use intonational features to signal these to his hearer. His emphasis is placed on the use of intonational signals to indicate such discoursally significant information as awareness by the speaker of common ground, the speaker's choice of presenting information as known or unknown to the hearer, the speaker's assessment of the relative information load carried by particular elements in his utterance, role-relationships between speaker and hearer, degrees of solidarity and apartness and so on.

V. FREE STUDY TRIP AROUND THE UNITED KINGDOM

My Itinerary

- ☆ One night two day train trip to Wales
Reading - Swansea - Cardiff - Reading
- ☆ Two night and three day car trip to Wales
Reading - Cardiff - Brecon - Aberyswyth - Banghor - Conway -
Chester - Newcastle - Birmingham - Stratford-upon-Avon -
Oxford - Reading
- ☆ Car and train trip to Scotland
London - Cambridge - Norwich - Lincoln - York - Edinburgh -
Stirling - Perth - Inverness - Loch Ness - Fort William -
Loch Lomond - Glasgow - Edinburgh
- ☆ Train trip to Highlands and Lake Districts and London
Edinburgh - Aberdeen - Inverness - Kyle of Lochalsh - Mallaig -
Glasgow - Carlisle - Windermere - London
- ☆ One day trip to Chester by train
London - Chester - London

This was one of the highlights of the course for all of the Japanese teachers. Since we were requested to travel and understand British culture and arts as much as possible, we tried to go as far and wide as we could, by using many kinds of transportation, such as coaches, steam boats, trains, and rent-a-cars. The more I saw of the British culture and arts the more I was attracted to them and the longer I was tempted to stay there. My impression is that the United Kingdom has too many traditional things to see in two and a half months and even one year would not be sufficient to cover its area though the area of the country is a little bit smaller than our country. Every one of her historical spots reflects glory and decline, gain and loss, wisdom and ignorance of human beings. Standing on Victoria Station platform, I recalled the cultural shock received by the Japanese diplomatic mission of the Meiji period. It was through the United Kingdom that the people of the Meiji era made great efforts to modernize Japan by copying great parts of her culture, especially the

educational and military systems. It is quite clear that one of the purposes of learning a language is to understand its culture. Without understanding its culture, we can not expect mutual understanding. Without mutual understanding, no matter how well we can manipulate the language, we are not able to achieve the main purpose of learning. As an English language teacher, I was very happy and thankful for having been given the chance to study in one of the three big English speaking countries. I hope this type of programme will continue for years to come for Japanese English teachers.